

# ハイファイデリティオーディオ ラジオ技術



Audience クリア・オーディエント The Oneスピーカ・システム

小さなスピーカ・システムである。たった2.5gしかないチタン・コーンを持つ、自社開発のロング・ストロークの3インチのシングル・コーン(A3S)ユニットを採用している。外寸は13×18×18cmである。

このスピーカの優れているところは、まず小さいくせにきちんと 50 Hz が出ていて、もう少し大きなスピーカでも出でていないこと

だ。低域の下支えがあるので、音楽にナチュラルさが感じられる。

カタログには80-22KHz. インピーダンス8オーム. 電力84dB(最大連続耐入力25W)とあるのだが、実際には正弦波でチェックしたら、50Hzきちんと聴こえたのである。本家ウェップで調べると、室内では40-22KHzとあった。使用法として、後面のパッシブ・ラジエーターから

出る低音が、壁から反射することを期待しているので、壁がないと低音が正面に来ないからだろう。

基本的に、音には色づけがなく、スピード感があり、小さなスピーカーとは思えない大きめの音像を結ぶ。期待以上にバス領域がよく、よりサイズの大きな小型スピーカーでもありがちな、やや高目にバランスがずれた感じはあまりしない。中域は充実

していく。高域もクリアでしかももうさくない。

色々試してみたが、アナログ・アンプでも、デジタル・アンプでもかなりよい結果を得られた。また、20畳くらいで、吹き抜け6mの空間に持って行っても、きれいに鳴る。これには、かなり驚いた。

以前から、シングル・コーン・スピーカの良さとして、定位の良さ、素直な周波数と位相特性などが言われて来たが、実際には帯域が足りないので、メイン・システムとしては敬遠するユーザーが多くいた。改善策として、同軸ユニットとする案もあるが、意外とコスト高となる傾向がある。

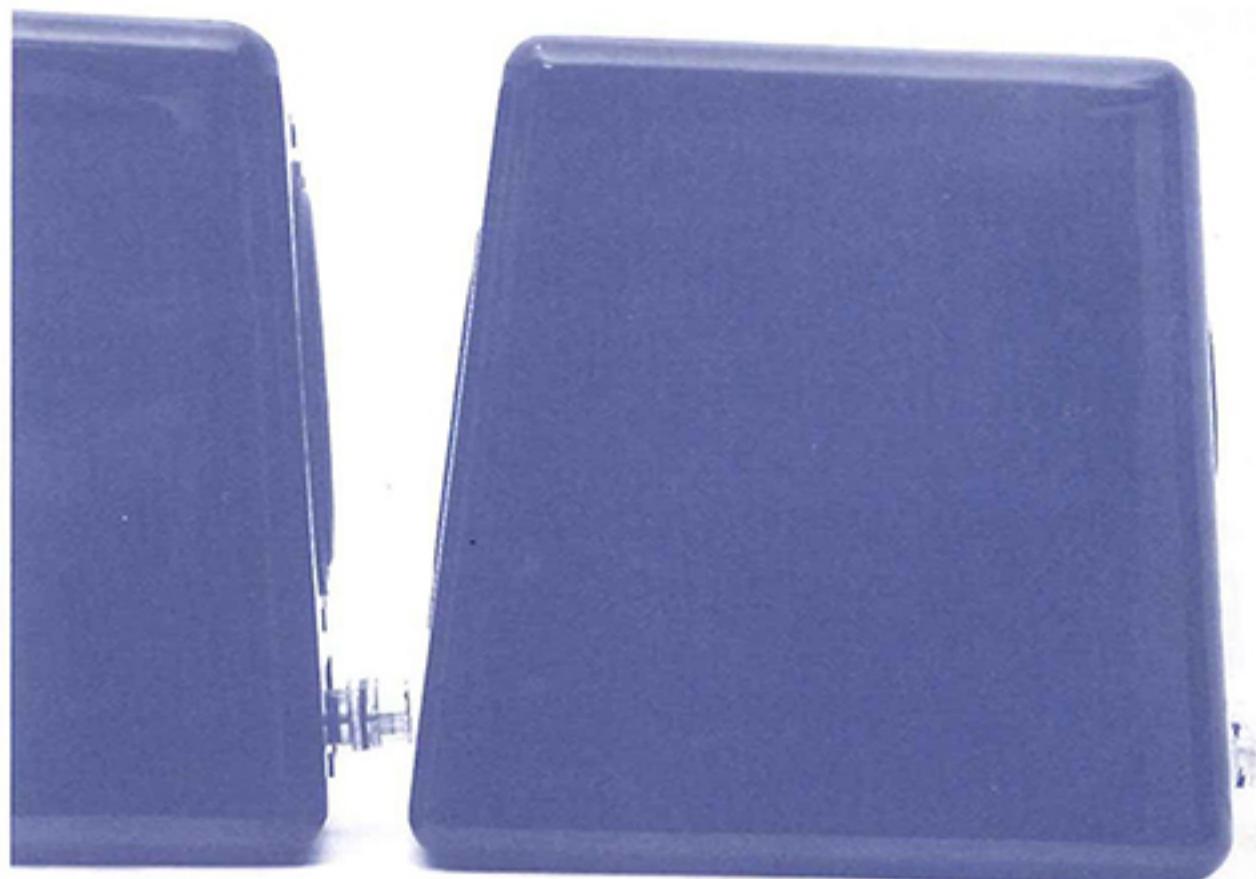
しかし、このThe Oneは帯域も十分で、音楽好きの最初のハイエンド入門スピーカとして、推奨できると思う。また、大型スピーカが置けなくなったりときの、代替用としても我慢できると思う。

室内楽よし、ジャズよし、J-PopもOK。R&Bでの電子バス・ドラムでも崩れず、中域以上を邪魔せずに再生できる。これは、このサイズのスピーカとしては、驚異的な再生能力である。これはヨイショの類ではなく、どなたも聴いてみれば納得して頂けるだろう。

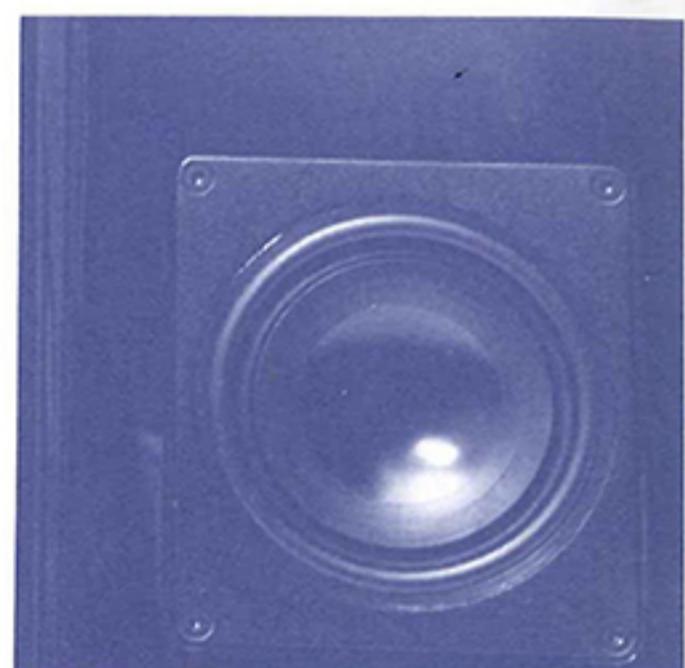
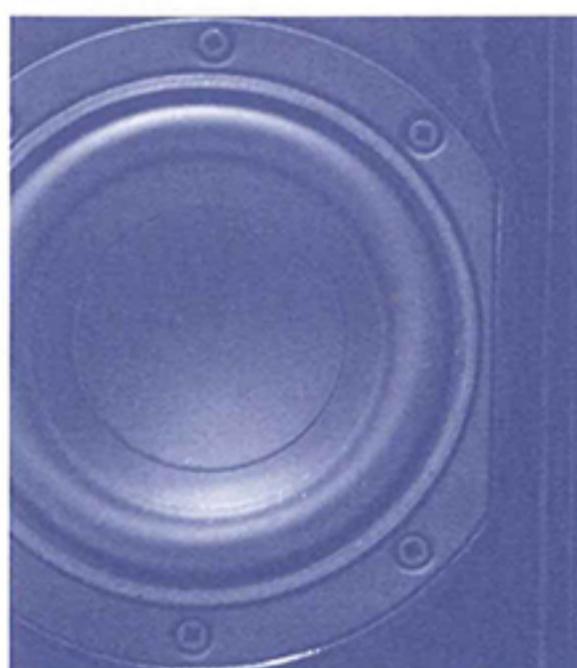
このスピーカで聴く、荒井由実の「ひこうき雲」最高だった。たまたま、宮崎駿の「風立ちぬ」を見た後だったのだが、調整のいい加減なシネコンの音よりも良かったかも知れない。

若干弱いのは、オーケストラの複雑なパッセージかも知れないが、ここはどのスピーカでも苦しいところなので、これは無い物ねだり。とにかく、殆どの音楽ジャンルに余裕のある対応ができるスピーカとして、売れ筋になってもおかしくない。

もう一つ良いことは、アンプに対



◆ The One を側面より見る。右がフロント面



◆ The One のフロント(右)とリア(左)

して神経質な反応をしないことだ。評判のよいスピーカでも、アンプの欠点をさらけ出す傾向があるものがある。上手く鳴らすのが難しいのである。

このThe Oneは、軽くて持ち運びが楽、大抵の隙間に置くことができるし、ご老体にも優しいスピーカである。ベテランのオーディオ愛好家が、今まで軽く持てたはずのアンプが、ある日突然持ち上げられなくなったと聞いたことがある。そんな方にも、このスピーカなら問題なさそうである。

ただ、この値段帯は競争が激しいので、商品群の中で埋没しないよう、

心して売って欲しいものだ。

このスピーカは、難しいことは考えずに、質のよいパワー・アンプにただつなぐだけで、元気だが、細やかな音がすぐ得られるだろう。壁との距離を調整するくらいで、取り敢えずバランスが取れると思う。このとき、オプションの専用ベースを使うと、安定して共振も起きにくくなる。

小型でハイレベルの音の出るスピーカを試聴して、技術は確実に進歩するのだと、確信した。エポック・メイキングな製品である。

標準価格は125,000円(ペア、税別)となっている。